

第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ 準大賞受賞作家・中谷優希インタビュー



《シロクマの修復師》(2022年) 撮影：宮脇慎太郎

《シロクマの修復師》という作品で、第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイの準大賞を受賞した中谷優希さん。出展作は、自身の闘病生活の経験を踏まえて制作されたそうです。老いや病気など、人は誰しも「ケア」（「世話」「手入れ」などという意味）が必要になる可能性があり、ケアをすることになった人も戸惑いを感じることもあるかもしれません。ケアのあり方の1つの形を伝えたいという中谷さんに、制作や作品について聞きました。

—出展作《シロクマの修復師》ですが、一見するとシロクマが主役のように見えますが、タイトルからすると修復師が主役なのでしょうか。

中谷

作品の映像の中でも修復師がどんどん疲弊していきませんが、日常で私のケアをしていてるパートナーがすごく疲弊してしまったことがありました。でもとてもセンシティブな問題なので、パートナーはケアについての悩みを他の人に相談できなくて孤立してしまっています。最終的には外の人の手も借りながら直面した問題に向き合い、2人で話し合ってたケアの形を考えてきました。そんな大変なことをしてくれたパートナーがかけてくれた時間や、やってきてくれたこと、考え方を残したいということが制作の根幹にあり、作品では修復師を主役にしていきます。そして作品の終盤では、シロクマである私が修復師をケアして終わるといって、ケアの関係の逆転が起きます。それは、修復師だって修復が必要だと思ったからです。ずっと自分の問題を作品にしてきたのですが、今は周りにいる人の考えや態度、経験を尊いと思えるようになりました。特にケアは、無報酬ではあるものの社会・経済の基盤を支えるために必要不可欠な労働の「シャドウ・ワーク」のひとつで、何もしないと誰も知らないままになってしまう人々の営みを残したい、見せたいということが今すごくあります。



—約1時間と結構長めの映像作品ですね。

中谷

長さをどうするか、制作で一番悩みました。これまでの映像作品は長くても15分、だいたい7、8分に収まるようにしていました。私自身が美術館に行って長い映像を見るのが辛いので。ですが、撮影してくれたチームのメンバーに早く編集した映像を見せた時に「なんか良さが全部なくなっちゃった」と言われたので、みんなで何度も話し合い、結局全部見せようということになりました。実際の日常のケアと同じで、映像内のパフォーマンスは少しずつしか変化しないですね。音がだんだん崩れていって毛皮がちょっとずつなくなるとか、修復師がどんどん疲弊していくとか。病気が治る過程って非常に時間がかかることで、本当に少しずつしか良くなって、ケアってとても屈辱なことの長い積み重ねだあって、いつもパートナーとも話しています。映像は短い方が多くの人にてもらいやすいですが、ケアというテーマを表すなら長いことが妥当なんじゃないかと考えて、今回は初めて1時間という長い映像の制作に挑みました。

—誰もがケアが必要な状態になり得るのですね。

中谷

今回、制作チームのメンバーに体調があまりよくない人がいて、その人の体調に合わせてケアをしながら作品を作りました。なので、実は作品制作そのものがケアの実践になりました。最初は、ちゃんとやってほしいなあ…という気持ちもあったのですが、ちゃんとやれない理由として体調不良があることに気付いた後は、ケアについて考えて制作しているのだから実践してみたらどうだろうって。

ケアの大事な考え方に negative capability というものがあります。物事の白黒を付けずに宙吊りにしておく力みたいなことです。今回の制作でもゴールを決めずに、メンバーの体調に合わせてあっち行ってこっち行ってみたいな宙吊り状態があって、人と堅実にコミュニケーションをとりながらの作品作りがケアそのものになる感じがして、すごくいい経験になりました。

これまでずっと制作が苦しかったのですが、今回、たまたまチーム内に体調が悪い人がいたので、作るプロセスをより大事にしてコミュニケーションをとることを意識してみたらやっとなんか苦しさから抜けられて、楽しかったなあって思いになりました。この方法を続けてみたいと考えています。



—パフォーマンスのたびに体調が悪い人を探すのは大変そうですが…

中谷

ケアとは、そもそもその人自身に何か働きかけるのではなく、その人が自力で活動できるように周りの環境を整えることだと思っています。体調に限らず、みんな何かしらの克服したいこと、やってみたいこと、困っていることがあって、完璧な人はいないのではないかと。一人一人にあった方法で、その人の環境と一緒に作っていくケアの実践を制作に取り入れていきたいです。

—映像の中で、修復師がシロクマの動作に本当に慌ててケアをしているように見えます。

中谷

例えば台本に「これを取る」「掴む」って書いてあっても、取り方はいろいろあってどう取るかの動機がないんですね。だから私には演技はできないって思ったので、パフォーマンス作品では、自分の体に負担をかけて、即興的に体がそう動かないような構造を作ってきました。過去作の《Scapegoat》(2018)では私は山羊に扮しています。脚と腕を山羊の脚のように変えるためのギブスを作ったのですが、あれが本当に痛くて、痛いから自分の足をカーンと蹴ってしまったり、転んだりゆっくり歩いたりしています。他の作品でも、あえて嫌いなものを食べさせられて鳴咽したりと、体が反応するような構造を作っていて、今作も基本はそのような作り方で私も相手のパフォーマーも動いています。でもこういう体に負担をかけるやり方は、安心できる環境がないとできないので、環境作り、それこそケアに本当に神経を使って制作をしていました。

—動物、しかもどちらかというと弱い立場の動物が登場する作品が多いですね。

中谷

動物以上に美しいものがない気がして、単純に動物が好きということがまずありますね。ただ、最近改めて考えることもあって、私が作品にした動物はみんな「人間を介している動物たち」で、《Scapegoat》(2018)では生贄にされている山羊、今回の《シロクマの修復師》では動物園で病気になっているシロクマです。なんかこう、人間の支配の中にいる動物が多いですね。

私自身も様々な人間関係に判断や行動が、よくない面に影響されてきましたが、どこか仕方のないことだと諦めている部分がありました。でも、症状理解を進める中で、支配やトラウマの構造を再演してしまうという病の症状があると知り、私がする/されるを繰り返さないための治療や勉強を行うようになりました。なので、私がそういう動物を選ぶのは、支配について関心があるからかもしれません。もう少し考え続けてみようと思っています。



—辛い経験がきっかけになった闘病生活だと聞いていますが、その経験に対する怒りは作品からはあまり感じられません。

中谷

もちろん、私に起きたことに対しては今でも怒りはあります。ただ、強い怒りをそのままぶつけたような表現よりも、例えばユーモアも交えながら、ちょっと違う角度から問題にアプローチする表現の方が、当事者ではない人も共感してもらえるかもしれない、という気持ちがあります。

また、私がコントロールできない怒りを抱えたまま突き進まずに済んだのは、パートナーや家族の支えがあったからで、聞いてくれる人・見てくれる人が側にいたからで、それはとても幸運なことでした。『優雅な生活が最高の復讐』（カルヴィン・トムキンス著）という本で知った考え方で、最高の人生を送ることが相手に対する復讐になる、というようなものがあります。これも私が怒り狂っていた頃にパートナーに教えてもらったことです。生活を整えることで、今はおいしいものを食べて楽しい思いもできて、ああよかったって、本当にそう感じています。



—中谷さんはトラウマや悩みを抱えている人のお話を聞くボランティア活動「傾聴活動」にも取り組んでいます。

中谷

お話を聞く上で、3つのことをルールにしています。まずは話を否定せずに最後まで聞くこと、問題と一緒に整理すること、支援団体や医療機関などの適切な機関につなげること、です。その中で私自身の経験を活かせたらと思っています。

闘病生活が本当に辛かったので、この経験を誰かのために役にたたらと思う一方で、傾聴活動に取り組んでいる理由のひとつに、何かの本で読んだんですが、ケアをすることでケアをされるということがあるからだと感じています。

病気をしていると社会から孤立しやすく、私自身もそうでした。誰かのケアをすることで自分が社会と繋がって貢献できているという充実感があり、またたくさんの人と繋がることによって自分の居場所も増えていきました。お話を聞かせてくれてありがとう、といつも思っています。

—今作は制作の方法を含めて、新たな試みがたくさんですね。

中谷

新しい挑戦も多くて、一つの分岐点になる作品だと思っています。実は絵を描いたのも8年ぶりくらいで、今までは例えば山羊の絵画作品のように、多くの人を知っている作品を踏まえて、その固定されたイメージをパフォーマンスを通して変える、という目的で絵画と関わりを持っていました。絵が思っていたよりも描けなくなっていてショックでしたが、作品の構造をこれまでとは違うものにしてみました。ただ、既存の絵の「更新」をやめて自分の絵を描くことでどういう可能性が出てくるのか、今作ではまだ分からなかったもので、次も絵を描いてみようと思っています。

振り返ってみると、予備校の時に、北海道出身の私は田舎者でも何も分かっていない、というようなことを言われたりして、ずっと自分のことを信用できずにいました。自分を信じないことで他の人の意見に柔軟になれるといういい面はあったんですが、自分の快/不快という判断基準がなくなってしまうって、一度自分を通過してくるものを閉じたい！という気持ちになり、大学の卒制では梱包のパッキングをテーマにした作品を作りました。すごく潔癖になって、塵ひとつないクリーンルームに閉じこもりたいて。その後、実際に閉じこもり、2年ぐらいの療養期間を経て、今回やっとまとまった作品を作りました。

今作のパフォーマンスの最後では、アドリブですが窓を開けています。美術館での鑑賞だと聞こえないかもしれませんが、外の商店街のロコックを売っている声も入っています。潔癖だったあの頃からすると想像できないことなので、自分でも変わった、体調が良くなったんだなあ、って実感しています。